

医療法人社団 頤正会 第4回口腔ケアセミナー抄録

頤正会 歯科臨床研修センター長 國松和司

平素より介護訪問口腔ケアでは大変お世話になり有難うございます。介護を受けられる方々が自分の口で食べ物を摂ることができ、咬みごたえと味に満足しながら食を愉しむ、そのことが QOL（生活の質）の維持・向上にどれほど役立っているかについては枚挙にいとまがないほどです。食物を口から摂取すると、その栄養分を狙って口の中で細菌が繁殖し、酸を作り歯を溶かしたり（むし歯）、歯周組織の構成成分の破壊により歯周病を惹起し、最終的には歯を支える骨（歯槽骨）まで壊されて歯を失う羽目になる、このことは数多くの人たちが経験されていることでしょう。この歯周病、30歳以上の日本人では8割以上もの人が罹患している、まさにう蝕（むし歯）と並ぶ誰でもがなりうる「国民病」のような存在になっています。

近年、介護口腔ケアの現場には歯科医師や歯科衛生士も参加するようになり、治療とともに口腔ケアが実践されています。歯科関連の従事者だけでなく、多数の介護サポーターの方々は、スポンジブラシや歯ブラシ、さらにガーゼなどを使って歯の表面に付着しているプラーク（歯垢）をできるだけ除去し、消毒をされていることでしょう。これは、歯周病やう蝕が細菌の感染症であり、外来から口の中に侵入し定着している口腔細菌が集合体（プラーク）を作りながらだに感染を始めとする悪影響を与えるという学術的なエビデンスの支えのもとで細菌の除去を試みていらっしゃるからで、それ自体、とても重要な処置であると言えます。しかし、歯周病の主な原因が歯垢（細菌）であることが証明されたのはわずか50年前のことであり、その後の細菌学の進展や顕微鏡等の機器の進歩などにより細菌感染症であることや細菌の種類などが解明され、それに伴い、治療法も随分進歩してきました。歯周病が細菌感染症であることをベースに、その感染に対する生体の防御反応である炎症反応や免疫反応が起こり、歯周組織内は複雑な混濁した状況となって破壊の方向へ進む、このように理解されるようになりました。さらに慢性であり持続性の感染症である性質上、その影響が血液を通して全身を循環し、口とは全く遠位の心臓、脳の血管障害（動脈硬化）、代謝性疾患（糖尿病）、慢性関節リウマチや妊娠婦への影響（低体重児出産）等々、従来の考え方では理解・説明できないほどの全身との関連性についての数多く報告がなされています。特に死亡率第3位となった肺炎の一つである誤嚥性肺炎や糖尿病（II型）との関連など、皆さん「何故か？」の興味を含めて知識の泉を広げられるように、また、より実践的に介護口腔ケアへ携わって頂けるように、このセミナーを開催したいと考えます。

そもそも歯周病とは？から始まり、全身との関連性について、できる限りわかりやすく説明したいと思いますので、多数の皆様のご参集を頂けるように祈念致します。